

はじめに——コロナと利他

伊藤亜紗

新型コロナウイルスの感染拡大によって世界が危機に直面するなか、「利他」という言葉が注目を集めています。

たとえば、フランスの経済学者ジャック・アタリは、二〇二〇年四月一日に放送されたNHKの番組「E.T.V特集 緊急対談 パンデミックが変える世界／海外の知性が語る展望」に出演し、パンデミックを乗り越えるためのキーワードとして「利他主義」をあげています。深刻な危機に直面したいまこそ、互いに競いあうのではなく、「他者のために生きる」という人間の本質に立ちかえらなければならない、と。

実際に、人々のあいだにも利他的な意識や行動が広まっているようです。なかでも顕著なのは、若い世代の動きです。

調査によれば、コロナ対策として国内の住民に一律配布された一〇万円の特別定額給付

金の使い道に関して、少なくとも一部を寄付にあてたいと答えた人の割合は、二〇代が三七%ともっとも多くなっています。さらに、定額給付金以外にすでにコロナ関連で寄付を行ったという人は、二〇代で一八・七%、四〇代で一〇%、六〇代で八・一%と、若い世代のほうが年長世代に比べて倍以上の高い割合になっています（「10万円特別定額給付金に関する調査」コロナ給付金寄付プロジェクト、二〇二〇年六月調べ）。クラウドファンディングの仕組みが普及し、寄付が身近になったことも、こうした変化の背景としてあげられるでしょう。

ビジネスの現場においても、利他という言葉を耳にする機会が増えてきました。

ビジネスと利他という稲盛和夫氏が有名ですが、最近では、やはりより若い世代のあいだで利他というキーワードが広まりつつあるようです。

たとえば、ファッションの世界。ファッションというと自分を着飾る利己的なイメージがありますが、もはやそれだけではないのです。ファッション誌「Harper's BAZAAR」の編集長、塚本香さんは、「今、ファッションナブルって何？」というコーナーで、ファッショナブルを定義するうえで「利他主義もこれからの重要なエレメントになる」と語っています（「Harper's BAZAAR」二〇二〇年十一月号）。

背景には、アパレル産業が抱える深刻な問題があります。私たちが毎日身につけている服は、つくられた分の約六割が着られることがないまま廃棄されているといわれています。また、染色など加工の過程で多量の化学物質を使うため、水を汚すことも大きな問題になっています。いまのファッションのあり方は、環境に対する負荷が非常に大きくなっているのです。二〇一九年にはついに、国連貿易開発会議で、ファッションは「世界で第二位の汚染産業」との汚名を着せられてしまいました。

また、安価な服づくりが開発途上国に負担をかけ、尊厳を欠いた労働環境をつくり出していることも問題になっています。二〇一三年にはバングラデシュの縫製工場の入ったビルが崩壊し、一〇〇〇人以上の労働者らが亡くなるという痛ましい事故が起きました。工場では、機械をたくさん入れ、私たちがふだん着ているような先進国向けの比較的安価な服が大量に生産されていました。

このように、いま、さまざまな分野で「利他」の考え方が注目を集めています。そのなかには、パンデミック以降に新たに生じた問題もあるでしょうし、パンデミック以前から存在していた問題が、パンデミックを機会により注目されるようになった、というものもあるでしょう。

科学技術も、社会の営みも、本来は利他的なものであったはずですが、私たちがこれほどまでに問題を抱えるようになったのはなぜなのか。そのためにはただ「利他主義が重要だ」と喧伝けんでんするだけでは不十分であるように思います。利他というものが持つ可能性だけでなく、負の側面や危うさも含めて考えなおすことが重要になってくるでしょう。

本書は、この問題について、分野も背景も異なる五名の研究者が、それぞれの視点から論じたものです。

第一章では、私、伊藤亜紗が、利他をめぐる近年の主要な動向を整理しつつ、共感や数値化など、そこにひそむ問題を指摘します。そしてケアの具体的な場面に焦点を合わせながら、制御できないものに開かれた「余白」を持つことに利他の可能性を見出みいだします。よき利他においては、他者の可能性が引き出され、私もまた変化しています。

続く第二章では、中島岳志さんが、「贈与」や「他力」といった利他の根幹に関わる問題について、志賀直哉の作品や親鸞しんらんの言葉などを手がかりに論じます。贈与には、相手に負債の感覚を植えつけ、支配することにつながる残酷な面があります。むしろ、思わずやってしまうオートマテカルな行為にこそ、利他が宿るのかもしれませんが。

第三章では、若松英輔さんが、柳宗悦やなぎむねよしや濱田庄司のテキストを通して「民藝」の美に迫ります。用いられるなかで生まれる手仕事の美からみえてくるのは、自他のあわいに起こる「出来事」や「場」としての利他のあり方です。利他は「利他」と名指すことによつて記号化し、死んでしまうと、と若松さんは指摘します。

第四章では、國分功一郎さんが、中動態の枠組みから、近代的な「責任」概念をアップデートします。「おまえが自分の意志でやったんだろう」と他者から押しつけられるような責任でなく、困っている人を前に思わず「応答」してしまうような責任のあり方。そのような心のかたちに利他の可能性を求めます。

第五章では、磯崎憲一郎さんが、小説の実作者の立場から、「つくる」行為の歴史性について語っています。つくるというと能動的な行為のように思えますが、書くことは予期せぬ流れに乗って「逸それて」いくことでもある。そうやって生まれた作品は、結果として連綿と続く小説の歴史に奉仕するための仕事になっている、と磯崎さんは言います。

五名それぞれ、立っているフィールドは違いますが、お読みいただければ、同じキーワードや観点を共有していることが分かると思います。

本書は、単なる論文の集まりという意味での「論集」ではありません。私たち五名は、

東京工業大学のなかにある人文社会系の研究拠点「未来の人類研究センター」のメンバーとして、現在進行形で共同研究を行っています。私たちは、「利他」という問題をめぐって、日々意見を交換し、雑談し、わいわいと議論しています。

本書は、私たちが全員ではぐくんできた利他をめぐる思考の、五通りの変奏です。その意味では、五章すべてが、五人による共著ともいえます。

この研究プロジェクトはこれからも続きます。まだまだ分からないことや、解決していない問題がたくさんあります。いま私たちが立っているのは、せいぜい「考えるべき問題を机のうえに並べた」という段階にすぎないと思っています。

だからこそ、本書を起点にして、みなさんも日常のなかにひそむ利他的な関係のおもしろさや奥深さ、あるいはその難しさに、目を向けていただけたらと思います。本書はあくまで出発点であり、思考の「種」にすぎません。さあ、いったいどんな利他の景色がみえてくるでしょうか。

目次

第一章 「うつわ」的利他——ケアの現場から

伊藤亜紗

利他ぎらいが考える利他

利他は自分のためになる？——合理的利他主義

私にできる最大の善——効果的利他主義

共感を否定する「数字による利他」

背景にある「地球規模の危機」

好かれる人になりましょう？

魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教える

数値化によって消える利他の感情

数値化と説明責任

ブルシット・ジョブ

管理部門の肥大化

他者のコントロール

信頼と安心

利他の大原則

コロナ禍のなかでの相互扶助

ケアすることとしての利他

計画倒れをどこか喜ぶ

うつつわ的利他

余白をつくる

利他の「他」は誰か

第二章 利他はどこからやってくるのか

中島岳志

「小僧の神様」と利他

「変に淋しい、いやな気持」

「贈与」の持つ残酷さ

マルセル・モースの『贈与論』

クラ交換は超自然的な力の命令

クラ交換は純粹贈与ではない

ハウ——人間の意思の外部による交換システム

ポトラッチ——贈与と負債

一般的互酬性は権力の萌芽

「利己的な利他」を越えられるのか

一方的な贈与——インドでの経験

返礼への違和感

「わらしべ長者」のなかの贈与

結果としての間接互恵システム

「聖道の慈悲」と「浄土の慈悲」

「私」は縁起的現象として存在している

五蘊の結合としての「私」

第三章

美と奉仕と利他

若松英輔

人間の意思に還元しすぎた近代
自己の限界を認識するのが他力
仏の業と利他
利他は私たちのなかにはない

「利他」の原義——「利」とはなにか
「利他」の原義——「他」とはなにか

柳宗悦——「不二」の哲学

美という「利他」

器の心

用いられるなかで生まれる命

「生ける伴侶」

利他は行うのでなく、生まれる

手仕事と利他の一回性

沈黙という秘義

余白のちから

美や他者が見えなくなるとき

論理の道の先に真理はない

他者のトポスへのまなざし

第四章

中動態から考える利他——責任と帰責性

國分功一郎

いま改めてポストモダンであること

中動態は何を表しているか

中動態の消滅と意志の台頭

古代ギリシアに意志の概念はなかった

切断としての意志——アレントによる定義

アレントにおける意志とギリシア

意志と責任の結びつき

ギリシアにおける行為と行為者の関係

ギリシア悲劇における意志

人間的因果性と神的因果性という二律背反の両立

意志と罪

責任と帰責性

責任から利他へ

第五章 作家、作品に先行する、小説の歴史

磯崎憲一郎

偶然の出会い

三十年後の驚き

作家は歴史に投げ込まれる

『楡家の人びと』に描かれた「大げささ」

ガルシア＝マルケス以前のマジック・リアリズム

小島信夫と保坂和志、作家の系譜

小島信夫の強烈さ

江藤淳のクリア過ぎる整理

三島由紀夫が「気味悪い」と言ったもの
すぐ傍に立っていた「トキ子」の異様さ

「これは馬小屋にするんでしょう?」

夢の中の無力感もたらすエネルギー

設計図のないところに生まれるもの

おわりに——利他が宿る構造—— 中島岳志

参考文献

第一章 「うつわ」的利他——ケアの現場から

伊藤亜紗

伊藤亜紗（いとう あさ）

一九七九年、東京都生まれ。美学者。東京工業大学技術創成研究院未来の人類研究センター長。リベラルアーツ研究教育院准教授。東京大学大学院人文社会科学系研究科美学芸術学専門分野博士課程修了。博士（文学）。専門は美学、現代アート。主な著作に『ヴァレリーの芸術哲学、あるいは身体の解剖』（水声社）、『どもる体』（医学書院）、『記憶する体』（春秋社、サントリー学芸賞）、『手の倫理』（講談社選書メチエ）など。

▼利他ぎらいが考える利他

「利他」とはなにか。

利他について研究を始めたとき、私は実は利他主義という立場にかなり懐疑的な考えを持っていました。懐疑を通り越して、むしろ「利他ぎらい」といっていいほどでした。

私はこれまで、目の見えない人や吃音きつおんの人、四肢切断した人など、さまざまな障害を持つている人が、どのように世界を認識し、その体をどのように使いこなすのかを調査してきました。

理由は追って説明しますが、障害のある人と関わるなかで、利他的な精神や行動が、むしろ「壁」になっっているような場面に、数多く遭遇してきたからです。「困っている人のために」という周囲の思いが、結果として全然本人のためになっていない。利他は利他的ではないのではないか？ そんな敵意のような警戒心を抱くようになっていたのです。

でも、だからこそ思いました。利他のことを正面から考えてみたい、と。なんてあまのじゃくなんだ、と思われるかもしれませんが。けれども研究者というのは、得てして本人にとってよく分からないもの、苦手なものを研究対象とするものなのです。

そして、実は多くの人が、「利他という言葉は聞くけれどその実態はよく分からない」と感じているのではないかと思います。

キリスト教の「隣人愛」や、浄土真宗の「他力」など、利他の考え方は伝統的に宗教的な価値観と密接に結びついていました。こうした背景を理解することは重要ですが、「はじめに」でお話ししたとおり、現代における利他という言葉は、しばしば宗教的な文脈とは切り離されて流布するようになっていきます。その結果、「利他」の輪郭もかなり曖昧なものになっていくように思います。

たとえば、利他という自己を犠牲にするイメージがあります。利他的な社会とは、お互いにちよつとずつ我慢しなければならないような社会なのでしょうか？

あるいは、共感の問題。利他と共感の関係は、利他をめぐる古典的な争点のひとつですが、利他に共感が必要だとしたら、共感できる人にだけ利他的に振る舞い、共感できない人に対しては、利他的に振る舞わなくてもよいのでしょうか？

こうした疑問を念頭に置きつつ、第一章では、現代社会が置かれた状況にフォーカスを合わせながら、これまでの研究プロジェクトを通してみえてきた「利他のかたち」について、お話ししてみたいと思います。

▼利他は自分のためになる?——合理的利他主義

まず、「はじめに」でもとりあげた経済学者ジャック・アタリの利他主義について考えていきましょう。

アタリは、以前からパンデミックを予想し、地球に迫る危機について警鐘を鳴らしてきました。そのなかで、彼は地球を救うために必要な利他主義の重要性を強く主張してきました。

アタリの利他主義の特徴は、その「合理性」です。件のNHKの番組でも、アタリはこう語っています。

利他主義とは、合理的な利己主義にはかなりません。みずからが感染の脅威にさらされないためには、他人の感染を確実に防ぐ必要があります。利他的であることは、ひいては自分の利益になるのです。またほかの国々が感染していないことも自国の利益になります。たとえば日本の場合も、世界の国々が栄えていれば市場が拡大し、長期的にみると国益にもつながりますよね。

合理的利他主義の特徴は、「自分にとっての利益」を行為の動機にしているところです。他者に利することが、結果として自分に利することになる。日本にも「情けは人のためならず」ということわざがありますが、他人のためにしたことの恩恵が、めぐりめぐって自分のところにかえってくる、という発想ですね。自分のためになるのだから、アタリの言うように、利他主義は利己主義にとって合理的な戦略なのです。

こうした考え方は、いうまでもなく、利他主義は利己主義の対義語である、という伝統的な考え方を意図的に転倒させたものです。

「利他主義 Altruism」という言葉は、フランスのオーギュスト・コントによって、一九世紀半ばに提唱されるようになった、比較的新しい造語です。「altru」とは古フランス語で「他者」のこと。元になったラテン語は「alter」ですから、これは「オルタナティブ（別の、ほかの）」という言葉をイメージすると分かりやすいですね。

コントが利他主義と言ったとき、この言葉は「利己主義 Egoism」に対置される言葉として想定されていました。コントにとって利他主義とは「他者のために生きる」こと、つまり自己犠牲を指していたのです。

こうしたコントの考え方からすると、合理的利他主義の考え方は、まさに「ルーツをひっくりかえす」発想であるといえます。これをどう考えるかについては、またあとで述べたいと思います。いずれにせよ、合理的利他主義は、現代の利他をめぐる主要な考え方のひとつとなっています。

▼私にできる最大の善——効果的利他主義

利益を動機とするという点で合理的利他主義の特徴をさらに推し進めたのが、効果的利他主義です。効果的利他主義の考え方は、日本人の感覚からするとちよつとギョツとしてしまうところもあるのですが、二〇〇〇年代半ばごろから、英語圏を中心とする若者エリート層のあいだでかなりの広がりを見せています。

効果的利他主義の理論的支柱となっているのは、哲学者のピーター・シンガーです。彼は、効果的利他主義の原則を、端的にこう述べています。

効果的な利他主義は、非常にシンプルな考え方から生まれています。「私たちは、自分にできるへいちばんたくさんいいこと」をしなければならぬ」という考え方

です。

（『あなたが世界のためにできるたったひとつのこと——〈効果的な利他主義〉のすすめ』）

自分にできる（いちばんたくさんいいこと）。ポイントは、「いちばんたくさん」というところにあります。最大多数の最大幸福。つまりこれは「功利主義」の考え方です。

効果的利他主義は、単に功利主義をとなえるにとどまらず、幸福を徹底的に数値化します。たとえば自分の財産から一〇〇〇ドルを寄付しようとする場合、それをどの団体に、どのような名目で寄付をすると、もっとも多くの善をもたらすことができるのか。得られる善を事前に評価し、それが最大になるところに寄付の対象を定めることによって、効率よく利他を行おうとするのです。

シンガールの本から具体的な例を引いてみましょう。アメリカで盲導犬を一頭養成するのに必要な金額は四万ドルである、という数字があげられています。これは発展途上国でトラコーマという目の病気を四〇〇人から二〇〇〇人治療できる金額に相当します。ならば、アメリカ国内での盲導犬の養成よりも、発展途上国での治療のためにお金を払ったほうが、より多くの目の悪い人を助けることができる。つまり「より多くのいいこと」ができるの

で、発展途上国のトラコーマ治療のために寄付をしたほうが効果的である、と判断されることになります。

実際、アメリカを中心にさまざまな効果的利他主義の団体が立ち上がっていますが、そのウェブサイトを見ると、行われているのは徹底的な「評価と比較」です。シンガールの著作名を冠した「The Life You Can Save」というサイトでは、「Best Charities」としてオスズの効果的な寄付先のリストが用意しており、ボタンひとつで手軽に寄付ができるようになっています。

あるいは「Giving what we can」というサイトでは、居住地、年収、家族構成を入力すると、自分が裕福さにおいて世界の上位何%に入ることが示され、年収の10%を寄付することによって、蚊帳であれば何張、寄生虫症の薬であれば何錠、健康な生活であれば何人分贈ることができるかが、一瞬で分かるようになっていきます。

▼共感を否定する「数字による利他」

効果的利他主義は、なぜここまで数値化にこだわるのか。それは、利他の原理を「共感」にしないためです。

最近親戚ががんで亡くなったから、がん治療の研究をしている組織に寄付をしよう。

職場に視覚障害者がいるから、盲導犬の育成を行っている団体に寄付しよう。

こんなふうを考えるのが、共感にもとづく利他だ、と彼らは言います。日本風にいえば、「ご縁」があつたもの、精神的物理的に近いものに対して、施しをしようとする。

ところが、効果的利他主義は、こうした共感にもとづく利他を否定します。共感にもとづいて行動してしまうと、ふだん出会うことのない遠い国の人や、そもそもその存在を意識していない問題にアプローチできないからです。

もちろん、だからといって、効果的利他主義者も共感そのものを否定するわけではありません。しかし、利他的な行動が共感に支配されないようにすること、共感よりも理性にもとづいて利他を行うことが重要である、と言うのです。シンガールの言葉を引いてみましょう。

効果的な利他主義者は、（中略）ともすれば人生を支配してしまいがちな個人的な思い入れから、自分を切り離すことができているのです。個人の思い入れを切り離すことがすべてではありませんが、それが生き方に大きな違いをもたらしています。そ

の根底には、自分の「傾向や好みや愛情」から独立した視点で、自身の生き方を評価するような、理性の力があります。

(同前)

実際にこの動きに賛同している若い人たちのなかには、就職先を選ぶときにも、共感よりも数字を重視する動きがあります。仕事の内容そのものが利他的であるかどうかではなく、数字のうえで利他的な仕事、つまりいちばん儲かる、ゆえにいちばんたくさん寄付できる職に就くことを選ぶのです。

たとえば、シンガールの本のなかで、プリンストン大学哲学科を最優秀論文賞を受賞して卒業した若者の話が紹介されています。その若者は、利他心が非常に強かったのですが、オックスフォード大学の大学院に進む道を蹴って、ウォール街に就職したというのです。利他とは対極にも思える、生き馬の目を抜くような金融街に飛び込んで、株のトレーダーになったのです。

これまでの価値観であれば、他者のために働きたいと考える若者なら、慈善事業を行うNPOに就職したり、社会起業家になったり、あるいは研究者になったりするケースが多かったでしょう。

ところがこの若者は、限られた給料しかもらえない仕事に就いて、その一割を寄付するよりも、ウォール街でめいっぱいお金を稼いで、その給料の半分を寄付したほうが、人のために働くには効果的だと考えたのです。彼の目標は「貧困にあえぐ子どもたち一〇〇人の命を救う」だったのですが、それをわずか一、二年で成し遂げました。

▼背景にある「地球規模の危機」

共感が否定される背景にあるのは、私たちが現在、地球規模の危機にあるという認識です。

もし地球上のすべての人がアメリカ人の平均レベルの生活をしようとしたら、それを支えるのに必要な資源を確保するために、地球が五個必要だといわれています。そのくらい、現在の先進国の生活の仕方は、環境に与える負荷があまりにも大きい、「地球に見合っていない」生き方なのです。

にもかかわらず、私たちは生活の仕方を根本的に変えることができないでいる。毎年のようにやってくる豪雨、頻発する山火事、溶ける氷河……このままでは地球が持ちません。環境破壊以外にも、感染症の問題や、先進国と発展途上国の格差の問題、人種や宗教を

めぐる分断など、私たちは地球規模の問題を山のように抱えています。

人間がこうした地球規模の問題にうまく対処できない根本的な原因は、人間の想像力の貧困さなのではないかと思えます。いや、想像力そのものは貧困ではないのですが、想像力ではとらえられないほどの量と複雑さで人々の活動が相互に、かつ未来にわたって影響しあう世界を、私たちはつくってしまった。

この地球規模の膨大で複雑な連関をあらわにしたのが、まさに今回の新型コロナウイルスでした。グローバル化によってあらゆるものがつながり、自分の行動が思いもよらないところに影響を与え、また影響を被る。地球規模のネットワークがあったからこそ、ウイルスはまたたく間に世界中に広がることができました。

増大する地球規模の連関と、それに追いつけない想像力。二〇二〇年の春、イタリアの小説家パオロ・ジオルダーノは、ロックダウン下のローマで、こう書きつけています。

ひとりひとりの行動の積み重ねが全体に与える効果は、ばらばらな効果の単なる合計とは別物だということだ。アクションを起こす僕らが大勢ならば、各自のふるまいは、理解の難しい抽象的な結果を地球規模でいくつも生む。感染症流行時に助け合い

の精神がない者には、何よりもまず想像力が欠けているのだ。（『コロナの時代の僕ら』）

このような想像しがたい膨大で複雑なネットワークを前にして、合理的利他主義や効果的利他主義が「理性」を強調するのは、ある意味では当然です。

つまり、地球規模の危機は、「共感」では救えないのです。なぜならそれは、想像もできないような膨大で複雑な連関によって起こっている危機であり、「近いところ」に関わろうとする共感では、とらえることができないからです。

だからこそ、人間は、理性によってこそ、地球を救うことができる。アタリの言葉を引用してみましょう。アタリは「人類のサバイバル」というかなり煽動的な言葉せんどうを使っていますが、同時に「理性」の重要性を主張しています。

消費者、労働者、市民として、寛容であることは自身の利益であると理解できるようにになってこそ、他者の存在や、他者と分かち合うことに寛容になれる。こうしてわれわれは、他者、とくに次世代を助けることは、自分たちの大きな特権であると同時に、自分たちの利益になると強く感じるようになる。

そのような自覚があつてこそ、自由という理想から利他主義という理想への本格的な転換が始まる。こうしてこそ、憤懣ふんまんから激怒への逸脱が避けられる。

そしてこの転換こそが、人類のサバイバルのカギである。利他主義が押しつけられるのではこの転換は生じない。誰もが利他主義を理性的かつ情熱的に熱望し、利他主義が人々の心の奥底に根づかなければならない。

〔2030年ジャック・アタリの未来予測——不確実な世の中をサバイブせよ!〕

▼好かれる人になりましたよ?!

みなさんは、このような合理的利他主義や効果的利他主義の考えについて、どう思われるでしょうか。

なるほどと思う面もあります。

たとえば、先に指摘した「共感」の問題。

共感といつてもいろいろありますが、それが近いところや似たものに向かう共感であるかぎり、地球規模の危機を救うために役立たないのは、彼らが指摘するとおりです。

加えて共感は、もっと身近な他者関係でも、ネガティブな効果をもたらすことがあります。

す。なぜなら、「共感から利他が生まれる」という発想は、「共感を得られないと助けも
らえない」というプレッシャーにつながるからです。これでは、助けが必要な人はいつも
相手に好かれるようにへつらっていないなければならない、ということになってしまいます。
それはあまりに窮屈で、不自由な社会です。

以前、特別支援学校の廊下に「好かれる人になりましょう」という標語が書いてあって、
愕然がくぜんとしたことがあります。もしこの言葉が、「助けてもらうために」という前提を無意
識に含んでいるのであれば、障害者には自分の考えを堂々と述べたり、好きな服を着たり、
好きなことをしたりする自由がないということになってしまいます。これは、障害者の聖
地カリフォルニア州のバークレーの街角で見かける、髪を紫に染めてタバコを吸いながら
悠然と車椅子に乗って進むパンキッシュな障害者の姿とはまったく対照的です。

また、こうした合理化が求められる背後にある事情として、とくにアメリカでは寄付の
文化が成熟しているという事情もあるでしょう。少し古いデータですが、二〇〇八年のア
メリカではGDP比で二・二%、およそ三六兆円を寄付が占めています。これに対して、
二〇〇七年の日本の寄付額はGDP比で〇・一一%、金額にして約六〇〇〇億円にとどま
っています。

個人寄付が多いのも特徴です。アメリカでは寄付全体の八割が個人寄付ですが、日本では個人寄付は二割。大部分が法人寄付によって占められています。

このような背景があるなかで、エリート層を中心に、「同じ寄付をするならどこに寄付するのが効率的か」と考えたくなるのは、自然な発想なのかもしれません。